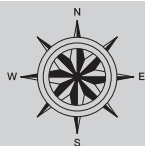


# 北から 南から



★この欄ではみなさまからのご投稿をお待ちしています。  
★送り先＝〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 日本図書館協会  
図書館雑誌編集委員会「北から南から」係  
★掲載は委員会で審議のうえ決定いたします。

石垣市地域おこし協力隊と石垣市立図書館の協働による  
「ここがいいね！」利用者アンケートと職員ワークショップの報告  
－地域おこしの拠点として図書館を位置づける日本最南端の試み－

渡邊義弘<sup>1)</sup>

## 1. 石垣島にある日本最南端の図書館

石垣島は日本列島の南西に位置し、東京からは約2,000km、沖縄本島からも約400kmの距離にある。沖縄県の県庁所在地である那覇市よりも台湾の台北市の方が近い国境の離島である。エメラルドグリーンの海に囲まれた面積約229km<sup>2</sup>の島は亜熱帯海洋性気候に属し、年間の平均気温は24℃。日本最大のサンゴ礁域である「石西礁湖」、沖縄県最高峰の「於茂登岳」、美しい景観で知られる「川平湾」などの多彩な自然環境を特徴とする。また、文化面においても独自の節がある八重山民謡や、仮面を付けて先祖の霊を供養するアンガマーなど、沖縄文化圏の中でも独特の文化と風習がある。行政面では石垣島と尖閣諸島を含めて沖縄県石垣市としての一つの市を形成し、人口は約5万人弱。竹富島、西表島、与那国島などの八重山諸島の文化、経済、教育の中心を担っている。

この石垣島にある日本最南端の図書館が、石垣市立図書館である。1990年建築の建物は八重山地方の伝統的な家屋様式が取り入れられている。また、資料面では約27万点を有

し、「八重山地域情報センター」として、八重山諸島全域の地域資料の中心となっている。



写真1. 八重山地方の伝統的な家屋の様式を取り入れた石垣市立図書館の外観

## 2. 石垣島で活動する日本最南端の地域おこし協力隊

筆者は2016年9月に石垣市地域おこし協力隊として任用され、石垣島での地域おこしに取り組んでいる。地域おこし協力隊とは、地方自治体が委嘱した地域外の人材が地域おこしに携わる制度である。地域おこしとは、地域活性化や地方創生などとも呼称され、非常に広い意味を含んでいるが、地域おこし協力隊制度の所管省庁である総務省によれば、「その具体的な内容は、個人個人の能力や適性及び各地域の実情に応じ、地方自治体が自主的な判断で決定する」<sup>2)</sup>とされている。石垣市においては、

「地域力の維持、強化並びに地域の活性化に資する」<sup>3)</sup>ことを目的に、筆者を含めた2名を第1期として2016年に開始された。具体的には、筆者は一次産業を中心とした地域資源の情報発信と産学官の連携に取り組んでいる。特に水産分野の情報発信を担った初年度は、若者層の地元水産物への関心度向上を目的にしたワークショップを実施した<sup>4)</sup>。

このような地域おこし活動の中で石垣市立図書館を利用する機会があり、職員による丁寧なレファレンスや、地域資料の充実、館内の空間性の良さなどに利便性と魅力を感じていた。その一方で、図書館からの告知が利用者に十分に伝わっていない可能性や、窓口でのコミュニケーションが偏ったものになっている心配があることなどの懸念の声を職員から聞くことが多くあった。

筆者は地域おこし協力隊として、この職員の懸念は注目すべきことであり、取り組む課題であると認識した。前述のように地域おこしとは多様な呼称と意味合いを持つが、それは地域の人々の生活を対象とするからであり、必然的に内容の多様性と境界の曖昧さを有する特徴がある。そのような特徴のある地域おこしに取り組む上では、情報の水平・垂直展開が必要不可欠であり、情報の収集だけでなく、発信と保存が重要となる。この点において、地域資料の集積地であり、その地域の誰もが利用することができる図書館は、地域おこしにとって重要である。その地

地域の図書館の活性化無くして、地域おこしは成り立たないと筆者は考えた。

### 3. 「ここがいいね！」利用者アンケート

このような考えを、職員から紹介された図書館長との対話の中で述べたところ、図書館としても地域おこしの視点での業務改善に協力を得たいとの申し出があった。そこで石垣市地域おこし協力隊と石垣市立図書館との協働が開始された。

まず、職員が全員そろって月1回の資料整理日である2017年1月27日に「情報発信・活性化勉強会」を開催し、職員が感じている課題を抽出した。そこでは、職員同士が業務について話し合う場が少ないことや、利用者が図書館のことをどう感じているのかわからないなどの課題が職員の共通認識としてあることが確認された。こうした課題を整理してみると、静かに利用するルールがある図書館では窓口で声を発するのは苦情を述べる利用者が多く、利用者が図書館のどこを良いと思っているのかを把握することが難しいという、環境的な要因があることが判明した。そこで筆者は、図書館の良さを募集する利用者アンケートを提案した。自分たちの良い点の理解が十分でなければ、少数であっても大きな声に必要以上に揺り動かされやすい。利用者からの苦情という軸だけでなく、自分たちの良さという軸を把握する必要があると考えたためである。この提案に職員も賛同したため、「石垣市立図書館のここがいいね！」アンケートが実施されることとなった<sup>5)</sup>。

2017年1月28日から2月23日まで

の期間で集まった180の「ここがいいね！」を分類すると、「点数が多いこと」などの資料に関することが72いいね！でもっとも多く、次に「雰囲気が良い」などの施設に関することが66いいね！を集め、3番目には「スタッフに関すること」が17いいね！を集めた結果となった。催し物単位ではなく、図書館全体としての利用者アンケートはこれが初めての試みとのことである。

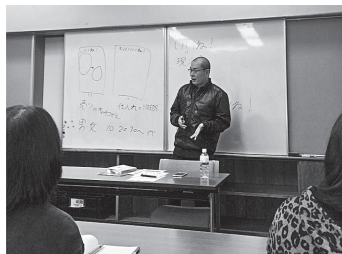


写真2. 情報発信・活性化勉強会



写真3. 窓口で設置されたここがいいね！アンケート用紙と回収BOX

### 4. 職員向けワークショップ

こうした集計と平行して、利用者の生の声である回答用紙を手にとって確認しながら対話する職員向けワークショップを開催した。これは前述の勉強会で課題として挙げられた職員間で業務について話し合う場

を設けるためである。勉強会の時と違い、職員全員が集まることができた月1回の資料整理日が年度末により利用が難しかったため、3~4人単位の4回に分けて、2017年3月7日、8日、9日、14日にワークショップを開催した。そこでは、「こんなにいいね！アンケートが集まるとは思わなかった」、「いい意見があっても書かないのではと思っていた」、「スタッフの対応のよさがいいという意見が多くて意外」などの肯定的な意見を実際に目にしたことへの驚きの声が多く出た。また、毎月2紙発行している広報誌についてのコメントが無かったことに注目して、「本の紹介ではなく、図書館として伝えたいことを中心にしないといけないのではないか」、「現在の利用者への案内か新規顧客開拓のどちらかに方向付けした方がいいのでは」などの改善に向けた声が出た。以上のように職員が話し合ったことをまとめ、アンケート結果とあわせて館内貼り出しと冊子版の配布を行った<sup>6)7)</sup>。

### 石垣市立図書館の「ここがいいね！」集計結果グラフ

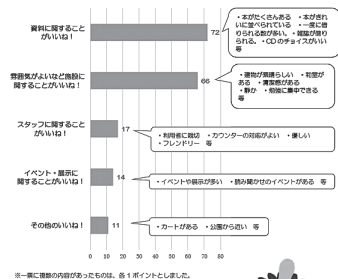


写真4. アンケート集計結果

## 5. 取り組みの意義と展望

地域おこし協力隊として今回の利用者アンケートと職員ワークショップは以下のような意義があると考えられる。第1に、日常業務の中では、いわゆる「声高な少数派 (noisy minority)」の影に隠れがちになる、「静かな多数派 (silent majority)」の意見を把握する機会となったこと。第2に、アンケート結果を基にして、職員一人一人が感じたことや気づいたことを持ち寄って対話を行い、日頃の業務を見直して改善を意識する機会となったこと。第3に、アンケートの集計と共に職員が話し合った結果を利用者の目に見えるかたちで発表したことにより、利用者と図書館との間に新しいコミュニケーションの回路が生まれたことである。

このように意義をまとめれば、地域おこしの拠点として図書館を位置づける可能性を以下のように導くことができる。日常業務ではわかりにくい、「静かな多数派 (silent majority)」がどのように感じているのかを把握し、利用者との間により良いコミュニケーションの回路を築いていくことは、図書館のみならず公共施設にとって大きな課題である。中でも図書館は地域の誰もが利用できる施設であり、その図書館における利用者とのコミュニケーションの活性化は、情報共有と発信が重要な意味を持つ地域おこしに直結するものである。前述のように、その地域の図書館の活性化無くして地域活性化はあり得ないと筆者は考える。この点で、今回の事例のように地域おこし協力隊と地域の図書館との連携は有効であると考えられる。

以上のように、日本最南端の地域おこしの協力隊である筆者と、同じ

く日本最南端の図書館である石垣市立図書館とが協働した今回の取り組みの事例報告を、地域おこしの拠点としての図書館を位置づけることの可能性を展望することで、この稿を終えるものである。

### 注

- 1) <https://www.facebook.com/yoshihiro.watanabe.5.26>
- 2) 総務省『地域おこし協力隊推進要綱』2009年
- 3) 石垣市『石垣市地域おこし協力隊設置要綱』2016年
- 4) 渡邊義弘「石垣島の中学生による地元水産物をPRするPOP広告作りの

ワークショップ～若者の水産物消費促進に向けた『石垣島モデル』の提案～」『漁協 (くみあい)』163号 pp.22-25 全国漁業協同組合連合会 2017年

5) 「ここがいいね!」を募集 図書館がアンケート」『八重山日報』2017年1月29日 第5面

6) 「市立図書館 180いいね! 利用者、雰囲気など評価」『八重山日報』2017年3月26日 第6面

7) 「市立図書館『本がたくさんなどの声』ここがいいね! アンケート実施」『八重山毎日新聞』2017年4月2日 第8面

(わたなべ よしひろ: 石垣市地域おこし協力隊, 東京大学客員研究者)

[NDC10: 016.2199]

BSH: 石垣市立図書館]

## 京都市図書館における

### 桑原武夫旧蔵書廃棄問題について

平川千宏

本年4月末にテレビ、新聞などで、京都市の図書館で、仏文学者・桑原武夫氏の旧蔵書約1万冊が、寄贈した遺族にも無断で廃棄されたというニュースが報じられた。

私の書誌づくりの過程での図書館への問い合わせが、その事実が明るみに出るきっかけになったということもあるので、その経緯を述べ、2、3の感想をつけ加えたい。

### \*

桑原武夫氏といえば、京都大学人文科学研究所を拠点とした「新京都学派」のリーダーと言われ、共同研究を組織して多くの学者を育てた。研究対象は、専門の文学のみでなく、文化、歴史、社会全般におよび、その業績、発言は、戦後の日本社会に大きな影響を与えた。また、京都市

に国際日本文化研究センターを創設するために尽力し、平安建都千二百年記念協会会長等をつとめるなどして、京都市名誉市民の称号を贈られている。

私は、若いころから桑原さんの著作に親しみ、桑原さんに関する書誌をつくったりしてきた。最初につくったものは40年も前のものなので、その後把握した多くの文献を加えて「桑原武夫に関する文献」を集大成するための準備にとりかかった(それは、他の二氏に関する文献目録と合わせて『平川千宏書誌選集-中井正一・桑原武夫・日高六郎』として、この8月に刊行された)。

その過程で、以前、桑原さんの旧蔵書が最初に寄贈され桑原武夫記念室が設けられていた京都市国際交流

会館を訪れた際に頂戴した『桑原武夫記念室所蔵図書目録』を文献の一つとしてあげようと考えた。ついで、現物の蔵書そのものがどこにあるかを確認して注記をしたいと思い、その後蔵書が移されたという京都市右京中央図書館に電話で問い合わせた。ところが、それに対する回答は、“蔵書はない、処分した”というまったく思いもよらないものだった。

私は驚き、桑原さんとも懇意だった旧知のKさんにそのことを告げ、本当だろうかと問い合わせた。Kさんは早速調査に乗り出して市の教育委員会にただしてくれた。教育委員会が調査した結果、それが事実であることが判明したというのが一連の経緯である。

\*

蔵書を廃棄した理由として、図書館の担当者は、蔵書が市立図書館全体の図書と重複が多かったので、目録があればいいと思ったと言っている。これは、この種の個人の旧蔵書の持っている意味をまったく理解していない考えである。旧蔵書のうち学術的な価値の高い一部の図書は京大などに入っているということなので、比較的一般的な本が多かったかもしれない。しかし、前掲の『図書目録』を見れば、漢籍や洋書をなお多く含んでいて、これらが市立図書館の蔵書と重複しているとは思えない。また、一般的な本でも、そこに桑原さん自身の書き入れがあったり、また桑原さんの交友の範囲は大変広がったので、著名人の献辞入りの献呈本も多数含まれていたはずである。これらは、桑原さんの思想や学問の形成過程を知る上での貴重な資料である。同じ本がどこかにあれ

ばいいというものではない。

廃棄したもう一つの理由として、利用が少なかったということがあげられている。

この種の資料は、もともと利用がそんなに多いものではない。そのため、むしろ利用されやすいような配慮や施策が必要である。ところが、報道によれば、国際交流会館から図書館に移されてから、段ボールは一度も開けられたことがなかったようである。私は、桑原武夫記念室が国際交流会館から京都市右京中央図書館に移されてからも、見学に行った。記念室はずっと規模が縮小され、蔵書のカード目録は備えられていたが、蔵書自体は市の別の図書館にあるとのことだった。目録と蔵書が別々のところにあるということに少々奇異な感じをうけたが、一時的な措置で、いずれは同じところに置かれることになるのだろうぐらいに考えていた。ところが、今回の報道では、蔵書は当初から段ボールに入れっぱなしで、最初から公開する気はなかったのではないかとさえ思われる。利用しにくい、というより利用できないようにしておいて、利用が少ないから…というのは、本末転倒である。

\*

公共図書館は、どこもスペースの問題では悩んでいると思う。だから、この種の個人の旧蔵書を受け入れることに慎重になるということはわかる。しかし、いったん受け入れることを決めた以上は、それをしっかりと保存し、利用にも供していくことが必要である。図書館の責任ある立場の人が、上記のような認識であったことに驚くし、さらにそれをチェックする機能がなかったということ

にも驚かされる。日本図書館協会の『日本の図書館－統計と名簿 2016』によれば、司書資格を有している図書館長の数は、例えば大阪市の場合は24人中23人なのに対して、京都市の場合は17人中1人しかいない。そうしたことなどが、今回のような事態を生み出す原因になってはいないだろうか。

(ひらかわ ちひろ：横浜市在住)  
[NDC10：0142  
BSH：1. 図書館資料 2. 京都市立図書館]